和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori　NPO法人百年の森づくりの会

2024 4.1

47号

巻頭言………1　／　公開講座：秩父事件と秩父山嶽の民と暮らし………2～5　／
在りし日の野澤和雄さん………6　／　野澤和雄さん追悼文………7～9　／
年間スケジュール………10

和名倉山・仁田小屋(棟梁野澤氏)と共に

理事長　高岡正彦

昨年(’23年)末、本会の理事である野澤和雄さんの訃報が伝えられた。難病を患っていることは知っていたが、会うたび治療計画・格闘の話を元気な大きな声で話していたので、奇跡が起きると信じていた。本会は’97年藪だらけの和名倉山の仁田小屋尾根のルート整備を始めた。’99年に仁田小屋の頭(1555m)までルートを確保した。’00年にようやく和名倉山山頂(2036m)に辿り着いた。そしてすぐに植林事業を始めた。21世紀の始まりに、百年の森づくりの会の植林を始めるということだ。この事業は’01雲取林道鮫沢橋付近で崩落があり、大変苦労したが、やり終えた時は達成感・感動を覚えた。

しかし、初代会長の内藤氏は既に次のことを考えていた。仁田小屋の植林小屋としての再建計画である。当時、仁田小屋尾根のルート整備・植林を任されていた私としては林道から200mも登ったところである仁田小屋は活用しづらいと反対していた。それでも’03年再建の予算の見通しがついたということで再建事業が始まった。その時、仁田小屋再建の棟梁である野澤氏と出会った。

多くの作業を会員で行うことで、節約されるはずだった。私も、木材の皮剥き、スカーフ・ノッチ造りに参加した。しかし素人の会員は観客でしかなく、野澤氏の仲間である秩父市在住の中川氏が会報6号で遅々として進まない資材作りを語っている。資材は雲取林道の最高地点となる聖沢付近の広場へ車で運び、そこからヘリコプターで搬入した。ヘリのパワーと機敏性に圧倒されながらも、野澤氏の資材の荷造りの正確さ、搬入順の緻密さに感動した。結局、大幅な予算超過があったものの’03年完成にこぎつけた。

その後の仁田小屋は、植林活動のベースキャンプとしてフル活用されている。また、埼玉岳連(現埼玉県山岳・スポーツクライミング協会)や埼玉県高体連登山専門部などに利用されている。’11年の「雲取山・両神山」の地図には造林小屋として載った。その後、解放されていないという事からか、記載が無くなった。それでも仁田小屋尾根、仁田小屋ノ頭、仁田小屋沢という名があるのだから仁田小屋はかなり古くから存在していたし、あるべき小屋だと思っている。昨年で再建20年目となった。

野澤氏は、その後植林するブナの確保、ブナの苗づくりに尽力を頂いた。さらに、長瀞の宝登山への植林活動を手掛け、ブナ・ヤマザクラ・クリ・ツツジなどが順調に育っている。これらは、滲み出る人柄のおかげだと思っている。自然を愛し、山を愛し、地元を愛する気持ちが滲み出て、人を集め、人に感動をつかませている。百年の森づくりの会での活動だけでなく、特に地元に尽くし、とても多くの事業を行ったと聞いている。

百年の森づくりの会は、野澤氏の人柄のように「水を育む山への恩返し」の精神を大切にし、活動の象徴となる「和名倉山」を中心に、育っていかなければならないと感じている。自然と共存する、地元の人と共有する心は、人を強くし、大きくすると思っている。強く大きな心は、地球愛を限りなく求め、世界平和につながると信じている。

ログハウスづくりの仁田小屋は、自然界のサイクルに当てはまる。みんなで作るログハウスは、強い絆を作る。山の中のログハウスは、山の動物たちとも近づける。第2、第3の仁田小屋を作りたいと明確に思うようになった。野澤さん応援してください。見守っていてください。

公開講座（令和五年十一月十九日）

秩父事件と秩父山襞の民と暮らし

講師　秩父事件研究家　山本雅保

本日は百年の森づくりの会で秩父事件について講演できることを光栄に思います。70年位前は秩父の人から見ると秩父事件の事は余り触れてほしくなかった。当時は鎮台兵と言いますが、天皇様の軍隊に歯向かった。秩父事件は官憲側から暴徒と見なされていた。秩父の人たちは暴徒の子孫だとか、一味だと見なされ、不当な扱いを受けて大変心苦しい日々を送ってこられた訳です。

ところが戦後昭和50年頃から秩父事件は単なる暴徒ではない。天皇様の軍隊に歯向かったことだけが全てではない。請願運動をやった結果、自分たちの生活が成り立たなくなって止むを得ずとった行動で、元々天皇様に歯向かうつもりは全くなかった。むしろ借財の無い人達までが秩父の人たちを何とかしなければいけない。義民の戦いの面もあるのです。義民の話は千葉や郡上八幡、栃木にもあります。当時は名主階級、支配者層がおり、配下にある人たちは年貢が払えない、税金を納めることが出来ない。当時は消費者金融や銀行の個人貸付などもありませんでしたので、高利貸しから借りた。これが悲劇をもたらした訳ですが、その点について年表を見ながら本質にせまっていきたいと思います。

【秩父事件の歴史的背景】

明治5年8月に学校制度による義務教育がスタートします。今では子の教育は当然ですが、当時の子供は立派な働き手でした。蚕の世話や弟妹の面倒を見る、また口減らしのため子守奉公に出る。当時は人の集まりやすいお寺を活用したのですが校舎を建てる余裕がないので、寺の講堂を使って義務教育が始まったようです。秩父札所の1番四万部寺にも校舎の跡があります。

明治6年7月に地租改正があります。今迄は出来たもので年貢を納める物納だったのですが、土地所有者は地租として地価の3％に当たる税を現金で納めなさいとなったのです。現金で納めろということが問題なのです。秩父の山襞の民にとって、現金収入で一番大きいのは秋の蚕です。春にも少しありますが、年に1回ないし2回の現金収入しかない。蚕の値段が安定しているときは勿論払えるのですが、生糸の値段は海外の市況の影響を受けていました。フランスなど当時の先進国の富裕層は絹製品を愛好していました。景気の良い時は高く買ってくれたのですが、明治10年位からフランス国内で蚕の微粒子病が流行ってしまい、その駆除は当時分からなかったので、フランス国内の絹織維産業は大打撃を受けた。

日本の絹産業は当時国内の主要輸出産業だったのですが、日本の生糸は海外からの影響をもろに受けて国内景気は大変悪くなった。今まで年に1回秋の生糸を売っていたが回らなくなってしまった。その引き金を引いたのが地租改正です。現金収入が限られている人たちに現金納付の命が政府から下された。

明治7年1月に民選議員設立建白書が出されます。土佐の板垣退助、後藤象二郎らが国会設立を要望します。明治になり、薩長閥の政府が7年程続きます。土佐肥前はおとなしくしていたのですが、薩長閥の政治をいつまでもやっていては駄目だ。開かれた国会にしよう。民意を問おうという運動が起きる。その流れもあって秩父の山襞の村にも国が定めたものは従わざるを得ないということから、もう一歩踏み込んで、もの申そう、我々の生活が成り立たない以上理解してもらって暮らしに反映していこうという機運が高まった。明治7年頃はまだお蚕様は良かった。

その後明治10年に西南の役が起こります。西郷隆盛を筆頭とする不平士族の反乱です。西南の役の色々な影響が秩父の山襞にも押し寄せました。戦争が起きると戦費が入ります。戦費調達のためには税金を沢山取り立てる。又は紙幣を乱発する。時の明治政府は両方やった訳です。紙幣の乱発で面白い小説に松本清張さんの西郷札があります。これは西郷軍が戦費調達の紙幣を乱発した。我々が勝てば藩札の価値は出るのだ。しかしその藩札には金の裏付けもありません。

政府軍も臨時の国債とか紙幣をたくさん出しました。戦争が終わると猛烈なインフレになる。国民生活が成り立たない。明治14年に薩摩の松方正義は大蔵大臣や総理大臣をやっていますが、増発した紙幣を抑えるため「松方デフレ」と言われるデフレーションを実施した。デフレとは金の流通量を抑えることです。戦費を乱発して膨張した国民経済を正常化することに目的があった訳ですが、デフレ政策をとれば経済は当然

悪化します。市況商品である蚕の値段は下がる。

秩父の山襞に暮らす人々の経済はモノカルチャー経済なのです。モノカルチャー経済には逃げ道がない。生糸だけに依存しているので選択肢がない。生糸が全てなのです。当時の政府は最大公約数の考え方で100％すべての人を満足させられない。切捨てごめん的なところがあった。デフレ政策により秩父に人たちは益々困窮した。

デフレの要因、モノカルチャーの要因だけでなく、税金の負担、学校教育の負担、労働力を担う子供の教育、富国強兵で公共工事など道普請、共有林の枝打ちなど金がもらえないものへ駆り出されるなどで大変苦しくなった。西南の役というのは、薩摩士族が西郷さんのために死んだが、全国への影響は大変大きかった訳です。弱い層に被害が出てきたところに注目しておいて下さい。

松方は明治15年に中央銀行制度に基づき日本銀行を創っています。諸外国に倣ってつくる。その先に何を目指したのか。日本銀行券には金の裏打ちがあった。金の延べ棒が日本銀行に保管されていて、金の延べ棒の価値以上の日本券を印刷する事ができなかった。金本位制です。松方は金本位制に戻して、日本円を資産に裏付けされた貨幣にして、国際競争力をつけようとした。競争力をつけないと軍事拡張の原資が無いわけです。間もなく日清、日露戦争があります。交換手段としての日本の貨幣価値の正常化を保つためだったのです。金本位制が確立するのは10年後です。金をどこから獲得したのか。日清戦争です。日本は勝って土地を割譲させ、２億テールの膨大な賠償金をとった。当時の国家予算の約２年分です。これを金で支払わせた訳です。そのおかげで金本位制が確立して、余ったお金で八幡製鉄所を造ったり、近代化を進めた。我々の歴史では陽の当たるところばかり見ていますが、今日の目的は秩父の山襞の民がどんなひどい目に合わされたか、後世の人のために、自活のために何故立ち上がったのかについて注目していきたいと思います。

【秩父事件の本質】

明治17年政府の富国強兵の強引な政策ならびに薩長出身の専制政府への反発が相重なって、国会で意を反映する機運がでてきた。民意を問うということから、その先頭に立ったのが自由党の板垣退助です。当時、立憲改進党は大隈重信です。自由党は急進左派的、立憲改進党は保守的でした。自由党の人たちが関東一円で騒ぎを起こす。騒ぎに乗じて国会の主導権をとってやろう、負の部分を表に出して国からの施策を引き出そうとした。

群馬事件とか加波山事件を起こす。自由党員が困った農民の所にオルグに行って反政府の転覆まではいっていませんが、自分たちの生活が成り立つような施策への転換を求めて立ち上がった訳です。そして一番激しくやったのが秩父です。群馬や加波山も何千人規模の農民が集まって政府への抗議活動はやったのですが、組織だってやるほどのパワーはなかった。

群馬や加波山の失敗をみて自由党は秩父事件が起こる前に党を解散してしまった。非常に日和見的なところがある。秩父の民は自由党の支援を信じていたが、明治17年11月に立ち上がった時は既に解党していた。秩父の困民党はそれを知らなかった節がある。ただ秩父の人たちは自立自活のため自由党を頼りにするが、自由党のオルグを受けて立ち上がった訳でなく、根源的に自分たちの生活が成り立たない。その要求も今の我々からすると非常にかわいらしい要求です。

まず、高利貸しから借りた金は返す。今迄借りた金は十分元本の２倍、３倍もの利息は払っている。当時は切り金貸、月貸など非常にインチキな貸し手に都合の良い貸し方がまかり通っていた。月貸は25日に貸しても月の利息を取っていた。切り金貸は100万円貸して、10万円手数料を先取して90万円渡す方法です。今の金融の世界ではありえないのですが、当時は平気だった。手数料は恐らく禁止されていなかった。明治15年にも利息制限法はあった。しかし法律は守る人がいなかった。違反した人がいた時に罰する人がいなければあってないようなものです。明治17年の時代、松方デフレで不況で苦しんでいる農民はその知識があったかどうかは分からない。

村の学校制度が出来ても子供が学校に行けない。生活が苦しくて、子供は蚕の世話を手伝わないとならない。忙しくて学校に行くどころではない。教師は驚いて借りている金を計算してみると、単純に利息制限法を優に超えて、借りた方としては元本を超えた金額を返しているので、待ってくれていいのではないか。そこで請願したのが10年据え置きで、40年年賦で返す。これを認めてほしい。農民の側からするとない袖はふれない。認めてくれないと田畑を抵当に入れているので、高利貸は抵当権を執行してくるわけです。お上は契約があって債務不履行を申し立てると農民には気の毒だけど抵当権の執行を認めざるを得ない。今の自己破産制度などない。当時は身代限りといって自分の身体だけは処分せず守ってやるが、他はだめ。いまは自己破産しても最低限の生活保証はされている。不要不急の金は持てる。当時はナベ・カマ・クワ、あるもの全て出しなさい。自分の身体だけで放り出される。シリアスの度合いが違う。だから激しい行動が起こったのです。学校が出来ましたが、子供が働き手であった。今学校にいかせ

る余裕がないので、義務教育の制度ができたが、３年間入学を猶予してほしい。

山越えの道を作るのに、当時は受益者負担の原則があって、県や国の補助はなく、自前で作った道が多い。道普請に引張りださないでくれ。生活が成り立てば当然やるが、今は苦しいのでお願いしたい。請願運動をやったが、なかなか功をなさなかった。

農民は文字を書けない人もいたりして、請願運動をする主導的立場にあった人はインテリか学校の教師が多かった。秩父事件の上層部には教師が多い。聖職の立場の教師たちは弱い人を助けなければいけないという気持ちが強かった。役場の書記の人は税金を取る体制側の人ですが、農民の近くに住んでいて、とても体制側の気持ちになれなかった。秩父の独特の山の民の運命共同体的なところがある。ナンバー３の井上伝蔵は生糸の買い付け問屋の商人で、生糸のビジネスがうまくいかなくなったことが要因の一つです。秩父に龍勢祭がありますが、その会場近くに屋敷跡があります。龍勢会館には井上伝蔵の屋敷を復元してあります。秩父事件の密議をしたのはこの蔵の２階か山の中です。山の中にいくのは秩父の民は馴れています。農閑期の秩父の民の楽しみは博打です。博打はご法度ですので、山中に隠れて博打をした。当時警察のスパイ活動や張り込みがありました。

官憲は農民が武装蜂起するとは思っていない。自由党がけしかけて何かするのではないか。農民はサーベルさげていけば逃げていく存在だった。ところが秩父暴動の勃発の日からは農民が神社の幟をとってはちまきと襷にして向ってきた。官憲としては驚きだったのです。農民がそのような行動を起こすとは思っていなかった。それほど切羽詰まっていたことを理解していなかった。ところが秩父の農民は武装蜂起した。そんじょそこらの農民でなかった。貧しくても苦労しても明るく楽観的、前向きでプライドがある。秩父は昔北条氏のテリトリーで恐らく元々は武士階級なのです。墓石の横に先祖に北条の名が刻まれています。気位があったと思われます。実直な秩父の人が自分の先祖代々の墓にそんなウソを刻むはずはないと思っています。

秩父事件は11日間戦いました。実際に戦ったのは３日。福島事件、加波山事件などの事件は大体１日、２日で逃げてしまっています。残党はいろいろ行きますが最後は信州の東馬流で警察隊と高崎鎮台兵との銃撃戦の末、壊滅しました。戦いは無謀であった。秩父農民兵の武器は火縄銃です。火縄銃でイノシシやシカを獲って生計の一部にあてていた。火縄銃は２千丁あったそうです。火縄銃の他は刀鍛冶の人は刀、何もない人は裏山から竹を切って竹槍を持ってきた。普通に考えると全く勝ち目はありませんが、何故そこまでして戦ったのか。そうせえざるを得なかった。やると決めたらやるというプライドが見えるような気がいたします。

笑い話があります。秩父に武の鼻の渡しというのがあって、東京警察隊と秩父農民兵と打ち合いになった。政府側は西南の役で残った古い鉄砲の玉を持ってきていたため発砲できず、農民兵の方が勝った。唯一秩父農民兵が勝った。

あとは、初戦で阿熊というところで警察隊は軽装備でサーベルを持っていけば逃げるはずと思っていたが、火縄銃で武装した農民兵に撃退された。また、半納の横道で群馬県警がきて農民兵の側にたった地元住民の女性ですが農民兵が隠れているところに誘導して、咳を合図に撃退した記録があります。このように一部局地戦で抵抗の跡があります。全般的には戦いにならなかった。村田銃と火縄銃では戦いにならない。

秩父事件最大の戦闘が金屋（児玉郡）の戦いです。秩父の大宮郷に占拠した後、政府軍が秩父の入口を抑えにかかったので、群馬側に突破口をつくろうとして金屋に進んだ。そこで政府軍と遭遇して戦いになった。円通寺という所がありますが、野戦病院になった場所です。農民兵は農家の畳を借りて盾にして身を隠しながら、頭半分出して火縄銃で戦った。夜戦で火縄銃は絶望的な餌食です。即死者６人、治療後の死亡者６人負傷者７人です。色々な悲劇があります。捕まっても、警察官を殺していなければ、禁固２、３年の刑で済む。潔しとせず、井戸に飛び込んで死ぬとか、左腕を打たれて、腕がぶらぶらになって、このままでは死ぬぞと言われても、施しは受けないと言って亡くなった人もいます。公の書物には残っていません。お上に盾突いた暴徒の記録などは英雄視して残してはいけない。当時の時代感覚ではできません。民衆の側でおじいさんから子供、孫に語り継がれています。

私は歴史の深堀が好きで、フィールドワークが好きです。図書館で読んでも通り一遍の事実内容でしかないので全く面白くない。裁判記録など全く面白くない。埼玉新聞では秩父事件史を詳細に出しています。

民の中にどのような気持ち、語りがあって、それを受け止めて後世の人がどのように生きてきたかを知りたくてフィールドワークを続けています。それが大事だと思います。現地に通っていますが、今は明治17年の事件を知っている人はいません。少し前まで孫・ひ孫がいました。その人たちの口は重かった。しかし80年以上経って、秩父事件は暴徒ではないということが語られてきた。

井上伝蔵という人が我々は略奪行

為をした暴徒ではない。国事犯だ。国に訴えて政策を変えようとした尊い戦いをしたのだと死ぬ間際に言った。これも伏せられていたが、徐々に見方が変わってきて、評価されてきた。それがきっかけで重い口を開き始めてきた。今は玄孫の時代になってしまったため、民間伝承は伝わっていない。風化しているのが現状です。

秩父事件の見方はいろいろあります。経済的問題、国の政策、金融政策、弱者保護の政策がなかった、金融手段は高利貸ししかいなかった。ちょっと前まで農民が頼ったのに頼母子講というのがありました。頼母子講は同じレベルの生活をしていると成立するのですが、一人でも欠落すれば成り立たない。皆が等しく貧しい時には成立しません、ですから秩父には有効に機能しなかった。

最後にどうなったか。あの狭い地域で3600人程度の人が罰金の刑罰を受けている。7人が死刑。完全な敗北です。郡上一揆など農民暴動で首謀者は打ち首になったが、代官側も罰せられた記録があります。年貢なども改正されています。秩父事件では残念ながらなかった。西南の役では不兵士族が一掃され、北海道に送られた。秩父事件で実刑を食らった人たちも北海道の道路建設などに送られています。被害者がたくさんいます。帰ってこなかった人はかなりいます。また、拷問を受けて亡くなった人もいます。7名が死刑になっただけでなく、多大な犠牲を出した。

何故立ち上がったのかを感じ取ってもらいたい。追い込まれて止むにやまれずはわかるのですが、村全体の問題として、地域の長も先生も庄屋階級の人も村全体で一塊になって何とかしようと立ち上がった。日本の歴史上非常に稀有な義民としての秩父事件の戦いである。これは他の地域ではありません。是だけの犠牲を出してやった意味があるのか。多分他にやり方があったといえます。他に時間稼ぎをするとか、生糸もその後持ち直しています。しかしその時の状況はそれしかなかった。橋渡しするものがなかった。今であれば、金融円滑法とかコロナ救済融資だとかいろいろな国民を救済する方法はありますが、その当時は貧しい明治17年日本の農村には手段がなかった。誰に頼ることなく自分たちで解決しようとした。これが秩父事件の本質かなと思います。

【秩父困民党の組織】

困民党の組織はきちんとした軍隊組織になっています。誰が考えたのか。恐らく総理の田代栄助と参謀長の菊池貫平です。田代栄助は代言人。今の弁護士的な方で国家資格はありませんが、経験とか村の主立ちで人望が厚かった人です。田代栄助は先祖代々の名主であり、何故体制側に立つような人が秩父事件を起こすのか。

副総理の加藤織平は村の中では富農です。お金もあって質屋もやっていた。参加する時に、質屋の証書を破り捨てて参加したという逸話が残っています。ひ孫の人に聞きました。歴史的価値のある秘密の会議をした蔵なども残念ながら今はなくなっています。

菊池貫平は知恵者で数少ない長野からの人です。長野からは他に井出為吉がいます。十石峠を越えて佐久平に行ってから参加した農民は多くいますが、その先駆けになった方です。地元北相木村で聞くと「菊池さま」と呼ばれています。菊池は甲府で捕まった。菊池も代言人で法律を良く知っていた。色々犯した小さな罪を少しづつ出して、時間差攻撃をした。裁判所に細かく出すので、一つ一つ審議するのに時間がかかったようです。明治23年に恩赦で無事帰ってきます。

会計長の上日野沢村の宮川津盛さんの家も現存して、子孫にお会いして聞いた話では、自宅からかなりの距離の山の墓場まで葬儀の際に参列者が途絶えることはなかったと言っていました。また本当の名前は守であったが、当時は守という字は官職に準ずる名前であるとして無理やり変えさせられたため、盛を使っているが、墓には守を使っています。宮川さんも元々教育者で人望があった人です。宮川さんはそんなに若くなかった人で、表立った活躍はしていない。椋神社に旗揚げして、大宮郷に攻め込んで、官公庁を占拠したときに、この辺でいったん収めて政治的に交渉したほうが良いのではないかと言った方です。

日本の世直し、打ちこわしは秩序があります。江戸時代の飢饉があった時の打ちこわしもそうです。海外の場合、中国の暴動やアメリカの黒人暴動では、危害を与え、略奪で物を取っていく。何をしても良いような無政府状態の状況になります。しかし秩父事件は秩序がありました。自分たちの暮らしを苦しめた高利貸しの目標の蔵は燃やしたり、証文を燃やしたりしたが、他の家に侵入したりしていない。これが日本の伝統であり、プライドです。

軍律も菊池貫平が作りました。この時代の新選組の武士道に通ずるところがあります。規律を守りながら戦ったのですが、最終的には村田銃によって壊滅した。軍事訓練を受けている兵隊と素人の農民がまともに戦っても勝てるわけがありません。

秩父事件は決して暴動ではありません、世直しのために戦ったというのが本質です。

以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

（文責　事務局）

在りし日の野澤和雄さん

2003年11月　野澤棟梁により完成した仁田小屋

仁田小屋正面にて　後方右が野澤さん

仁田小屋で昼のひととき　右が野澤さん

長瀞宝登山下草刈り終えて　前列左から2番目野澤さん

二〇〇七年十月四百名参加した長瀞宝登山植樹祭の時の野澤さん

2016年4月　宝登山補植作業を終えて会員と共に

長瀞苗畑作業　座って談笑する野澤さん

長瀞苗畑作業　会員と共に　後方右が野澤さん

仁田小屋造りの棟梁逝く　　会員　中川 芳和

野澤和雄君が逝った。

近年入会された会員諸兄はご存じないかも知れないが、仁田小屋のログハウスは初代の故内藤勝久会長のもと西暦2003年に完成した植林作業小屋だ。昨年末に亡くなった当会理事の野澤和雄君はその設計を担当し建設を指揮した棟梁で、材料の買い付けから機材やヘリの手配までこなした私の戦友だった。詳しくは会報6号の拙稿「建つや建たざるや」を参照していただくとして、少しだけ仁田小屋建築を振り返ってみたい。

同年6月に秩父産の杉丸太を買い付け、内藤会長以下そのころの会員総出で東大演習林にて製材と皮むきを行い、当時大滝村立であったが廃校になっていた光岩小学校を借り受けてログハウスの建築に取り掛かった。

ログハウス建築の経験者を先生役に、ログハウスとは何かに始まりスクライバーによる丸太のケガキ、チェーンソーや局面カンナの使い方まで手取り足取り教わり、一段一段を積み上げげながら素人集団なりに奮闘した。土日に光岩小学校に泊まり込み、通算30回以上、のべ600人くらいが参加しての仮組作業で、会員の奥様方も食事の準備にお手伝いいただき、事故もなく楽しい時間を過ごした。

光岩小学校に泊まり込み、作業を終えて集う会員
前列中央が中川さん　後列中央が野澤さん

彼は当時ご夫婦で日本百名山に挑戦中で、その頃は山々を巡りながら生業の仕事とログハウス造りを並行して行っていて、東北の五山を一挙に登山した翌日も生来の楽天的な大きな声をあげながらでログハウス造りに生き生きと参加していた。

9月末の仮組解体と輸送用の梱包、10月の初めにヘリによる荷揚げ、10月と11月にかけての現地でのログハウス本組、その後の屋根ふきと内装仕上げは素人には手に余るので本職に任せて、やっと11月半ばに落成した。今では玄関上に内藤会長の揮毫による看板まで掲げ堂々としたたたずまいを見せている。

「あの頃が一番楽しかったなあ」が生前酔った時の彼の口癖で、その点私は彼を失った今も100パーセント同意する。

野澤和雄さんと仁田小屋　　副理事長　東 克明

野澤さんとは仁田小屋建設の頃から。仁田小屋は造林小屋を改修再建したもの、設計・建築は建設業を営んでいた野澤さん。その設計はモダンなログハウス。再建では野澤さんの経験・知恵と情熱が至る所で発揮された。基礎はコンクリート直接基礎、野澤さんは岩盤を支持地盤としているので安心と説明してくれた。2002年の基礎施工でも中に発泡スチロール板を使うことで使用コンクリート量を削減したのも野澤さんの知恵である。

2003年、野澤さん吟味の秩父杉をログ材として、加工・仮組みを旧光岩小学校で行った。建て方もヘリコプター空輸、カニクレーンでログ材を吊ったが殆どが人力。準備・加工・建て方と会員も参加したが主力は野澤さんとその仲間、宮原さん、市川さん、井深さん他の方々で、野澤さんのネットワークのおかげである。

再建は凡そ1,200万円、各種基金の支援のおかげで可能となったが、建築中・竣工時でも資金不足の状態で野澤屋さんには極めて格安の価格で工事を進めて頂いた。

植林作業時ストーブを囲んで酒を酌み交わしながら至福の夜を仁田小屋で過ごさせてもらっている。しかし再建から17年、激しい風雨にさらされ、一部ログ材が劣化、ギャラリー床材も損傷、対策が必要になった。資金も厳しく会員で補修をとなった。野澤さんは抗がん剤治療中でとても山に入れない。それでも私達が頼れるのは信頼できる野澤さん、何度も具体策を教えてもらい、何とか野澤さんのイメージを具現化すべくやってみたが、何分素人集団で何とか補修したが、野澤さんの作品でもある仁田小屋の価値を損ねたのかもしれない。それでも、補修後に写真を見せて報告したときに「それでいいよ」と優しく話してくれたのが嬉しかった。

長瀞宝登山作業　前列右が東さん

野澤さん、様々な活動を御一緒させて頂き楽しく愉快な時を過ごさせて頂きました、有難う御座います。安らかにお休みください。

合掌

野澤さんとの思い出　　会員　川村 久一

暮れに野澤さんが亡くなりました。野澤さんとはいろいろ思い出があります。長瀞野上の苗畑で幼稚園の子供たちと一緒に牛乳パックに種を播いたり、水やりなどをしました。しばらくすると芽が出てきたので、土に移し替えました。苗畑にはいつも10人くらいは参加して作業を行いました。野澤さんは木の選定をしていました。

台風の時、風で日除けが飛ばされてしまい、日除けの修復作業を行ったり、木に虫が付いたりした時には二人でよく消毒をしました。夏の苗畑の草取りは大変だったことを思い出します。

宝登山の植樹した箇所の下草刈りにも参加しました。ツツジなどを植えるところに目印の竹を立てたり、場所を決める時も傾斜があるので気を付けながら作業をした思い出があります。

草刈り作業のあと皆さんと一緒に昼食を食べに行った時、この食堂は野澤さんが建てたと話してくれました。天井や横壁周りなどを見ているとボロが見つかるからあまり見ないでと言っていました。皆んなで思わず笑ってしまいました。

野上の苗畑を返還するため、野上の苗畑より宝登山へ、車で７回くらいブナの木や苗木を運びました。野澤さんが、樹高４メートルくらいのブナの木を１回に20本、あの急な坂道を車で運びました。その後、苗畑にあった小枝など、皆んなで拾ってきれいに後片付けをした思い出もあります。

長瀞宝登山の下草刈りで汗を流す川村さん

野澤さんが運んでくれた約140本の木を翌日皆で相談しながら穴を掘って植えました。作業は２日かかり全て植え終えることができました。

しばらくコロナの影響で参加できませんでしたが、久しぶりに去年の５月、野澤さんの駐車場に集合して、そこから宝登山の下草刈りに参加しました。私が野澤さんと会うのは４年ぶりでした。野澤さんは顔色も良くお元気でしたが、８月に入院されたと聞きました。長瀞の草刈りは８月が最後でしたが、ここにも参加しました。

野澤さん、楽しい思い出をありがとうございました。

野澤さんとの思い出　　副理事長　守谷 裕之

ドスの効いた声で話してくる野澤さんはいつも笑顔を忘れなかった。独特の秩父弁で色んな木の話をしてくれた。日大の水上演習林で育てたブナの苗木を冷蔵庫に入れて成長を止め植林する時に出し、その温度差から季節を感じ取り再び眠っていた状態から目を覚まし成長を始める。直根を切って良いのかいけないのかという議論を僕は聞いていたが理解できなかった。和名倉山へ運ぶときには確か直根を切って短くし、大きなビニール袋に入れて担ぎ上げた。画期的な植林方法だった。野上の苗畑には残ったブナの数は約300本、17年ものになっていた。それを福島県田村市に2014年４月に270本植林した。もう15ｍを超え正確に測定出来ない程に育っている。

野澤さんと言えば宝登山、その麓にご自宅があり宝登山を毎日眺め、何度山に入ったことか。百年の森づくりの会が植林したエリアを定期的に下草刈りしている。その際、機材を運び上げるのに野澤さんの軽トラで運び上げた。またデリカの四駆で頂上から降りて来た時には驚いた。人が歩いても結構きつい坂だ。大して道幅も広くないところをユラユラしながら降りて来て、そして登り返す。

僕のハイエースはちょっとした悪路にも弱くハンドル操作を間違え側溝に前輪を落としてしまった。途方に暮れている時に降りて来た地元の人が野澤さんに連絡を取ってくれた。そして間もなくして大きなエンジン音が聞こえて来た。林道幅いっぱいにして中型トラックが上がって来た。野澤さんは様子を確認して直ぐトラックに積んであるユニックを操作しハイエースを持ち上げにかかった。帯状のベルトが食い込み、僕のハイエースが凹むと思ったら作業を止め冷静に判断して側溝から前輪を持ち上げて脱出。本当に頭が下がる思いだった。

早期退職して木工を始めた時、腕もない僕に大仕事をくれた。１本のきれいに製材された山桜を３枚に大鋸（おが）で挽き、それを接ぎダイニングテーブルの天板を作ってくれないかというものだった。蟻桟を入れ厚さ５㎝にそろえる。１か月は掛かった作品を見て野澤さんは褒めてくれた。野澤さんは建築のプロだから色んな大工さんの仕事を見ている。胸を撫で下ろす思いだった。

色々とお世話になりました。ありがとう。

野澤和雄さんを偲んで　副理事長　内藤　建三

野澤さんは私にとっていつも『豪快な親父さん』でした。お会いする機会はほとんど百年の森づくりの会の活動の中でしたが、お会いする時はいつでも明るく笑顔が絶えず、そして大きな声が特徴的でした。野澤さんは周りの人達を元気にするオーラを振りまいている方でした。そんな病気とは無縁のような野澤さんが、数年前から体調が芳しくないとの話をされるようになった時も、普段と変わらない野澤さんの様子を見て、大病を患っているとは夢にも思いませんでした。昨年は以前の様に下草刈りに同行されることはありませんでしたが、毎回野澤さん宅に集合する際にはいつも笑顔で迎えて頂きました。

一昨年の秋頃、将来的な長瀞移住を計画していた際に、長瀞周辺の土地情報を伺いに野澤さんを訪問致しました。闘病中に関わらず長々と時間を割いて、私の相談に乗って頂きました。またその際の話の中で、新しい治療法が非常に効果的で、お体の状態が非常に良くなっているということを嬉しそうにお話しされていました。私自身もそのお姿を見て少し心が軽くなったのを憶えています。

長瀞宝登山の下草刈りに参加　左が内藤さん

先々は良き隣人として長いお付き合いができると思っていただけに非常に残念でなりません。ただ私の心の中に刻まれた『豪快な親父さん』は今も色褪せることなく残っています。今でも野澤さんのお姿を思い出すだけで元気を頂いています。野澤さんの生前のエネルギッシュなイメージが強すぎて、未だにお亡くなりになられたことが実感できていない気持ちですが、これからも宝登山の麓で我々の活動を見守って頂ければと思います。

心からのご冥福をお祈り申し上げます。

野澤さん　ありがとう　常務理事　小林　公彦

野澤和雄さんが12月25日にご逝去されました。３年前にがんがみつかり、闘病を続けていました。昨年の８月の長瀞宝登山の下草刈り作業を終え、また来年よろしくとの会話をしたのに突然の訃報に愕然としました。

野澤さんは、百年の森づくりの会のトップリーダーとして数々の功績を残されています。

先ずは、何と言っても和名倉山仁田小屋の再興です。和名倉山ワークのベース基地として仁田小屋の再興のため、棟梁としてご尽力いただきました。光岩小学校での丸太材の皮むきからログハウスの仮設置に汗を流したこと、仁田小屋建設のためヘリでの搬送、現地での建設など苦労は数々ありましたが完成した時の感動は今でも忘れません。

第二に、2007年10月長瀞宝登山の植樹祭に際し、当時の大澤長瀞町長を始め長瀞地域の取り纏めをしていただき、当日400名の参加は壮観でした。その後３回の補植を重ね、1600本の植樹ができました。当時そば処「おおさわ」で何度も会合を持ちましたね。

また、2005年頃東大演習林でのドングリ拾いから、長瀞野上の苗畑で育苗作業をスタートさせたこと、日大水上演習林からブナを移植したこと、イヌブナ・ミズナラなど数多くの苗木を育て、和名倉山・長瀞宝登山のほか福島県田村市の東日本大震災復興支援のためにブナ280本のほか1070本の苗木を搬送して植栽したことなどいろいろありました。苗畑の育苗作業は2020年に終了しましたが、毎年50名前後の会員が集いました。15年間野澤さんがいつも明るく先頭に立って動き、和気藹々と楽しく作業した思い出が蘇ります。

それから、野澤さんご夫妻が中心となり地元有志主催のふれあいコンサートも忘れ難いイベントでした。地元にゆかりのある方の弦楽四重奏とコーラスグループの演奏会は10年間開催され、百年の森づくりの会のPRや苗畑で育てたポット苗を配布しました。ある時、全国的にも優秀な秩父高校コーラス部の「旅立ちの日に」の合唱は感動的でした。

野澤さん、いろいろ苦労もあったけど、楽しかったね。本当にありがとうございました。心から感謝申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

2024年 活動スケジュール

活動への参加をご希望の方は、事前に事務局まで御連絡ください。

	総会・理事会	フィールド活動		その他
		和名倉	宝登山	
4月	■会報47号発行 ○4/14(日)常務理事会		◆宝登山　下草刈り作業 日時:4/14(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駐車場広場前	◎福島県田村市植林状況調査 日時:4/7(日)
5月	●5/20(月)理事会 場所:さいたま市市民活動サポートセンター	◆第52回和名倉山ワーク 日時:5/25(土)~5/26(日) 集合:8:30/西武秩父駅	◆宝登山　下草刈り作業 日時:5/12(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駐車場広場前	
6月	■第17回通常総会・記念講演会 日時:6/2(日)午後2時00分から 場所:埼玉会館 13:30　開場 14:00~14:50　第17回通常総会 15:00~16:30　記念講演会 16:45~18:30　懇親会 ○6/16(日)常務理事会		◆宝登山　下草刈り作業 日時:6/16(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駐車場広場前	
7月			◆宝登山　下草刈り作業 日時:7/21(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駐車場広場前	
8月				◆三峰分校ワーク 日時:8/6(火)~8/7(水) 集合:8:30/西武秩父駅
9月	○9/28(土)常務理事会		◆宝登山　下草刈り作業 日時:9/8(日) 集合:9:00/宝登山 ロープウェイ駐車場広場前	
10月	■会報48号発行	◆第53回和名倉山ワーク 日時:10/19(土)~10/20(日) 集合:8:30/西武秩父駅		
11月	●11/18(月)理事会 場所:さいたま市市民活動サポートセンター			◆公開講座 日時:11/10(日) 会場:未定
12月	○12/16(月)常務理事会			

和名倉百年の森　第47号 2024年4月1日発行
発行者：NPO法人百年の森づくりの会　高岡正彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局
〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-1コムナーレ9階
さいたま市市民活動サポートセンター内　メールボックスA-71
TEL/FAX：0480-22-3131
http：//www.100nen-forest.org　e-mail：info@100nen-forest.org